

2022年3月20日

四旬節第三主日

菊地功大司教 メッセージ

出エジプト記は、モーセの選別の物語を記します。神は自らを「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と名乗り、神の救いの計画を形作る時間の流れが、人間の常識をはるかに超えて連綿と続き、その一つ一つの時代の中での関わりが、すべからく結びあわされて一つの流れを形作っていることを明確にされます。

神の救いの計画を形作る時の流れは、今も連綿と続いており、わたしたちの理解をはるかに超えたところで、神はご自分の計画を成し遂げて行かれます。

パウロもこの雄大な時間の流れに触れ、神の救いの計画の中であって、すべてが結びあわされていることを明確にし、今を生きているわたしたちも、その流れの中で結びあわされていることを示します。パウロは「立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい」と記すことで、わたしたちが自力ではなく、実は神のはからいの中で生かされている存在であることを示唆します。

ルカ福音は、神がその怒りをわたしたちに向けないのは、忍耐強く待つておられるからであり、わたしたちはそのあわれみの中で生かされているものであり、何気なく毎日を過ごしてはいけないということを示唆する、イエスの言葉を記します。わたしたちは、常なる回心へと招かれています。四旬節は、わたしたちを包み込む神のあわれみの中で、わたしたちが神によって生かされていることを悟り、回心へと導かれるときでもあります。

四旬節の第二金曜日、先日3月18日が、日本における「性虐待被害者のための祈りと償いの日」でありました。多くの教会で、本日四旬節第三主日に、この意向でミサが捧げられます。

いのちを賜物として与えてくださった神を信じるわたしたちには、いのちの尊厳を守る務めがあります。したがって教会の聖職者には、その務めを率先して果たすことが求められます。

残念ながら模範であるはずの聖職者が、いのちの尊厳をないがしろにする行為、とりわけ性虐待という人間の尊厳を辱め蹂躪する行為におよんだ事例が、世界各地で多数報告されています。なかでも保護を必要とする未成年者に対する性虐待という、卑劣な行為を行った聖職者の存在も明らかになっています。日本の教会も例外ではありません。

加えて司教をはじめとした教会の責任者が、聖職者のこうした加害行為を隠蔽した事例が、世界各地で報告されています。

いまシノドスの道とともに歩んでいる教会は、互いに耳を傾けあい、支え合いながら、連帯の絆に結ばれた共同体であることを目指しているはずです。互いの絆の中で、同じ尊厳あるいのちを与えられたものとして、ともに神によって生かされている共通理解を持つようとしているはずです。賜物であるいのちとその尊厳を守ることが、教会の一人ひとりの務めであり、そして共同体の努めであることを認めようとしているはずです。日本の教会が、いのちの尊厳を守り抜くための努力を怠らない教会共同体となることを、わたしたち司教をはじめ聖職者が妨げている事例があることを、大変申し訳なく思っています。

世界中の教会に多くの被害者がおられます。教会は、しばしば無関心や隠蔽も含め、被害を受けられた方々に大きな罪を犯してきました。申し訳ありません。わたしたち司教や聖職者がこのような罪を繰り返すことのないように、信仰における決意を新たにし、わたしたちを生かしてくださる神のいつくしみによりすがり、愛のうちに祈り、行動したいと思います。